

「平成24年度から国家公務員採用試験が変わります！」

# 採用試験の新たな潮流

～経験者採用試験による採用者へのインタビュー～

経験者採用システムが導入されて5年。人事院は、これまでに数多くの経験者採用試験に協力してきました。そこで社会人経験者を対象とした試験に合格し、農林水産省に採用されたお二人にお話をお伺いしました。

## 人事院人材局企画課

人事院では、公務部内の育成では得られない専門性や多様な経験を有する有為の民間人材の選考採用を推進するため、平成一八年度から「経験者採用システム」を導入し、各府省の選考採用に協力して、公募や筆記試験、課題討議、人物試験などの能力実証を行っています。また、平成二四年度からは、総合職試験・一般職試験・専門職試験と並び、経験者採用試験が実施される予定です。

そこで、今回、経験者採用に積極的な農林水産省で採用され、ご活躍されている佐藤さん、小宮さんに現在の職場や民間での経験など幅広いお話をお伺いしました。

### 六次産業化の推進

——現在、どのような職務に就かれているのでしょうか。

**佐藤** 私は平成二二年の七月から水産庁漁政部加工流通課に所属しています。水産業の中でも魚を獲って水揚げした後から食卓に上るまでの過程に関する政策の企画・立案を担当しています。

農林水産省では、六次産業化というキーワードで農林水産行政を展開しようとしています。「一次産業×二次産業×三次産業」、つまり、農林漁業と製造業、小売業が連携をする、また、農林漁業者自らが生産したものを加工し、販売するところまで担い、付加価値

をより高めて、手取りの向上や経営の安定につながる、これを総称して六次産業化といいます。私は、水産業の六次産業化を推進するという仕事を主にやっています。

我が国は、人口が減っていますし、魚を食べる機会が減り、魚の値段もどんどん下がって、輸入品に押される魚種や加工品も出てきているような中で、漁業者の方々が安定的に経営を行うことができるようにするためには、漁業者の方が魚を獲るだけでなく、獲って売るところまで考えて、がんばっていただきたということ、そういう取組をしてくださる方々を支援する施策を考えています。



佐藤 一絵（さとう かずえ）さん  
新聞社、出版社勤務を経て平成20年4月に農林水産省に入省。現在、水産庁漁政部加工流通課に所属。

### 米粉の生産・消費拡大の推進

——小宮さんはいかがでしょう。

**小宮** 私は現在三つ目のポストである総合食料局食糧部計画課、お米の政策の全般を取り

扱う部署におり、米粉の生産・消費拡大の推進に関する業務を担当しています。

以前、日本人は年間でお米二俵（一二〇キロ程度）ぐらいを食べていたのですが、今はその半分のお米一俵ぐらいしか食べなくなっています。パンや麺、肉などを食べるようになったからです。今、主食用のご飯をまかなうためには、日本の水田面積の約六割で済むようになっており、残り約四割の水田をどのように有効利用していくかが課題になっています。

一方、パンや麺の材料である小麦は日本の消費量の大部分を輸入しており、家畜のエサになるトウモロコシもほとんど輸入しています。そこで、それらを日本の風土に合ったお米に代えて、残り約四割の水田で、米粉用としてのお米、飼料用としてのお米を生産して、自給率を高めて食料の安定供給につなげていくための仕事をしています。

具体的には平成二二年度に「米穀の新用途への利用の促進に関する法律」（米粉・エサ米法）という法律を作って、生産現場と製粉業者、販売業者が連携し、需要を拡大していくよう、補助事業、税制、制度金融といったツールを使って推進しています。

### 霞が関との距離感

——佐藤さんが新聞記者をされていたときの霞が関のイメージは。

**佐藤** 記者として北海道の農業が盛んな地域の支局にいたときは、農政は決して遠いものではなかったのですけれども、霞が関の役所自体は相当遠いところでしたね。

その後、東京支社に転勤し五年ほど勤務した中で、一年半霞が関担当の記者をしておりました。

新聞記者は一般的に公務員をたたくことが本業のように思われているかもしれませんが、私は、取材を通じて優秀な官僚の方に数多く出会いましたし、真剣に国益と国民のことを考えて仕事をされている方がたくさんいるということも分かり、公務員そのものに悪いイメージはありませんでした。ただ、省庁の構造問題として、縦割り行政の弊害といえますか、横の連携をすれば、より国民のためになるのではないかなと思ったことは何度もありました。

### 行政のサポート

——小宮さんは外資系の企業にいらっしやったということですが。

**小宮** 外資系の食品商社に七年ほどいました。そこでは、海外から輸入した農産物を国内で販売したり、その仕組みを作ったりしていました。また、それ以外にも、全国各地の農家と提携して国産野菜の生産から販売までを一貫して行うプロジェクトの立ち上げにも携わっていました。

——民間でも農業関係のお仕事だったというところで、特に苦労されたことはございますか。

**小宮** 農業をやりたくても土地が集まりにくいことや、新しい参入者は地元の農家の方々になかなか信用してもらえないというケースがありました。行政のサポートにより、うまく話が進展していくこともあり、大いに助けられました。やはり農業を推進する上で、行政は大事な役割を担っていると思いました。



小宮 元晃（こみや もとあき）さん  
外資系食品商社勤務を経て平成20年4月に農林水産省に入省。現在、総合食料局食糧部計画課に所属。

### 施策の伝え方

——ところで民間でのご経験はどういう点で活かされているのでしょうか。

**佐藤** ずっと公務員として働いている方々ばかりの組織に、外の空気を吸った人間が入ることによって、今までにはない発想がより出てきやすくなる面があるのではないかと思

ます。

以前、一般の方に対して公表する資料を作成することになったときに、幹部から、「役所言葉を使わず、一般の方の目線に合わせた文章を書くように」との指示がありました。そこで、私が指名され作成したのですが、完成した資料を見た幹部から、「これは役人には書けない」とほめられたことがあります。

省庁のホームページやプレスリリースは分かりづらく、内容が伝わっていないとよく思っています。各省庁とも、素晴らしい施策を展開しているのに、アピール下手であるため、マスコミには悪いところばかり取り上げられる傾向があるかもしれません。

そういう点で、過去の仕事の経験が少しは役に立つかなと思っています。国民に対して施策の内容をきちんと伝えていくことは、どんな業務の担当であっても、常に意識してやっています。

**小宮** 前職で補助事業を受けていたときの行政とのやりとりでの経験ですが、行政がどういう目的で補助事業をやっているのか、分かりづらい部分がありました。

また、前職では、例えて言うなら小学生でも分かるぐらいポイントを突いた分かりやすい文章を書けということとずつと言われていました。そのため、自分が施策を進めていく上で、長い文章で難しい言葉を使って説明し

ているところを、分かりやすい言葉でどういう意味があるのかも含めてきちんと伝えていくようにしていきたいと思っています。

行政でずつと仕事をしてきた方は知識もあり、行政に関してはとても太刀打ちできないのですけれども、私たちには民間で培ってきた発想があつて常に比較するものがあるので、気づく部分がいっぱいあります。

また、どうしても役所は予算を確保することが大事なところがあるのですけれども、民間では結果の方が問われます。今後、そういった民間の発想を行政に少しでも反映させることができれば、この制度も意味があるものになるかもしれないですね。

——その他に気付いた点はございますか。

**小宮** 仕方がないのかもしれませんが、役所は新しい発想が出づらいつつあります。民間であれば、例えば、本組織以外に別のフラットな組織を作り、その組織がカンフル剤になって、新しい発想を引き出して実行していくということはよく行われるのですが、役所の場合は、組織だつてはいるがゆえに、動きがやや鈍くなつています。

それに、いわゆる決裁が多いですね。何か間違つたことを発信したら、国として多くの人に迷惑をかけてしまうので、とにかくすべて決裁を取るといふのが大事だといふのも分かるのですが…。

**佐藤** 小宮さんが言われたとおり、国民の貴重な税金を活用して施策を展開しているわけですから、慎重な判断が求められますし、そのために多段階のプロセスを経てようやく意思決定までいくこと自体の必要性は、否定はしません。ただ、国の根幹にかかわる施策であればともかく、かなり些細なものでも、同じようなプロセスで行われているので、時には、こんなことまでするのか、もつと効率的な働き方ができないものか、などと思うことがあります。

#### 組織・業務の印象

——経験者採用の第一期生としてプレッシャーみたいなものはございましたか。

**佐藤** 特にありませんでした。農林水産省は官民交流も盛んにやっているので、みなさんすんなり受け入れてくれたという感じがありました。

——職場がオープンな感じだったということでしょうか。

**佐藤** はい。おかげさまであまり違和感なく、職場に溶け込むことができました。

**小宮** 農政のトピックを抱えている部署に配置してくれたり、早く経験を積めるよう人事で工夫していただいているという印象を持っています。

——小宮さんは環境関係の部署にもいらつしやいましたね。

**小宮** 農業環境対策課にもいましたが、平成二〇年当時は、ガソリンや肥料が非常に高騰した時期だったので、補正予算の目玉として農林水産省に燃油肥料高騰対策の大きな予算が付きました。

そこでヒートポンプといって、燃油ではなく電気で暖める機械を導入し、燃料消費を抑え、二酸化炭素も減らす施設園芸農家を支援したり、過剰に投与されている肥料を必要最低限に抑える技術を使用する農家を支援したりしました。

補正予算の編成作業はすさまじいスケジュールで、夜中の三時に決裁が回っていたりして驚きましたが、達成感もありました。例えば、自分が下書きしたメモや資料の内容を、翌日、大臣がテレビで話されたこともありましたが、また、作成した資料が日本全国で使われたということもありました。

——女性の視点から見て霞が関の働きやすさはどうでしょうか。

**佐藤** 業務内容にもよるとは思いますが、長時間労働になる傾向があるという点では大変ですよね。もちろん、子育てをしながら活躍されている女性職員もいますが、特に国会会期中、部署によっては定時で帰るのが非常に難しいのが現実です。国会の質疑内容通告を、例えば必ず質疑二日前の正午までに行っていたかというように、抜本的な仕組みが改善

されない限りは、終電を逃してしまうような事態はなくならないでしょう。私は子供がおります夫の理解もあるので、残業続きでも大丈夫ですが、子育て期間の女性職員にとっては、家族や周囲の協力が相当ないと、仕事を続けることが困難になってしまう場合もあるというの、とても残念なことだと思います。

そうしたことを除けば、女性にとってハンディがあるとか、女性が働きにくいとかいうことはありません。実際、女性職員の採用も増えていますし。

### 大いにチャレンジを

——最後に経験者採用試験の受験を考えている方にアドバイスをお願いいたします。

**佐藤** どんどんチャレンジしていただきたいと思います。民間でもみなさんそれぞれやりがいを感じながら日々働いておられると思いますけれども、公務の世界も法律を作ったり、予算を執行したり、世の中をよくすることに直結している非常に重要な仕事です。世の中のためになるというミッションが明確な仕事だけに、大変なことや難しいこともあります。それを超えるような達成感が得られるチャンスがあると思います。

農林水産省の経験者採用入省者は現時点で十一人いますけれども、前職は金融関係、製薬会社、地方公務員、メーカーの営業職など、多種多様です。国民の多種多様な声を拾い上

げるのは公務の大事な仕事だと思いますので、これからもいろんな分野から公務の世界に入ってきていただければうれしいです。

同僚から学ぶことが日々たくさんあり、そういう意味で、自分自身がまだまだ成長できるといえるのは貴重なことです。社会経験をある程度積んでからチャレンジする場としてお勧めだと思います。

**小宮** 民から官への流れというのは、始まったばかりで、私たちもどういうふうに分たちの力を農林水産省の中で発揮していけるのか、農林水産省もどうやって私たちを活用していけばいいのか、試行錯誤しているところではあります。

そういう中ではありますが、農業に限って言っても、全国各地で衰退して耕作放棄地がいっぱいできており、また高齢化も進んでいるなど、やらなければならぬことがいっぱいあって、逆に言えば、やれるところがいっぱいあるのです。

こういう時こそ、霞が関にもともという人だけでなく、いろんな分野の人がいろんな知恵を出し合っていけば、きっとよりいい政策が生まれると思います。ですから、いろんな方に入ってきていただければと思います。

(聞き手 経験者採用グループ)

人事院月報(二〇一一)二月号より抜粋